

### みおしえ

「だれがこの大地を征服するのであろうか？だれが閻魔の世界と神々とともになるか？」の世界とを征服するのであろうか？わざと巧みな人が花を摘むように、善く説かれた真理のことばを摘み集めるのは誰であらうか？」(法句経四四 中村元訳)

「学びにつとめる人こそこの大地を征服し、閻魔の世界と神々とともになるか？」の世界とを征服するのであろうか？わざと巧みな人が花を摘むように、学びにつとめる人々こそ善く説かれた真理のことばを摘み集めるであらう」(法句経四五 中村元訳)

この法は、仏がサーヴァッテイーにおられたとき、五百人の比丘についてとかれたものである。あるとき、比丘達は仏と共にゆきようを終え、祇園精舎に帰り会堂に集合した。そして自分達が歩いた土地について「平らだった、ここはこぼれ泥が多かった砂が多かった」と話した。そこで、仏が現れ、「それは外の土地の様子です。そなた達は心の内なる地について学び修行しなればならない」と、この法を示された。説法の終わりに五百人の比丘は無碍の智慧を得て阿羅漢果の境地に達した。心の内なる地をよく知り、学人は真理の言葉八正道等を学び、よって内なる心を耕すべきである。

(ダンマパダ全詩解説 片山一良参照)

### 心の言葉

南無妙法蓮華経と唱え

花を摘むように、

真理のことばを摘み集めよう

### お題目で成仏する十

日蓮聖人は、四條金吾へのお手紙の中で、「受るはやすく、持はかたし。さる間成仏は持にあり、すなわち法華経を持つことは難しいが、それを持つ時は、人は成仏して居るとおおせである。法華経を持つ時は、南無妙法蓮華経と信心によって口と心と行いつつ、命を一つに重ね合わせることである。此れは仏の命に我が命をチャネリングすることである。元々仏の命と一つのものであり、もとより仏なのである。これを本覚といふ。しかし、この地上で生活するため、肉體故に地上に我は、やや動物的な個人格となつて居る。それ故に人生に苦しみ悩むものである。人は、南無妙法蓮華経と仏の意識を心に導入し持つときは、仏に帰るのである。人の靈性は肉體意識の故、やや低級となつて居る。南無妙法蓮華経と唱え口と心と行いつつ、お題目を成仏してゆくのである。ここで注意すべきはお題目を保持する間は成仏して居るが、注意を怠ると動物間的なる傾向がある。私たちがよく注意すべきである。南無妙法蓮華経と唱え仏の意識を心に導入すべきである。また人は、釈尊のように修行して悟れば完全な仏となり、後はもう修行しなくても仏であり続けるのである。この地上で生を保ち肉體を持ち続ける以上、肉體からの影響を受けつづけ意識は苦しみを受けていたり動物的な影響からである。人は地上において浄土を建設し、習し楽しむ事を目的として居るから、この肉體意識も仏の意識も大切にし、バランスよく生活すること共にならなければならない。天上の仏の意識と地上の人間の意識を共にバランスよく南無妙法蓮華経と持ち生活しよう。